『幻を追う人』読解のこころみ (4)

井　上　三　朗

目　　次

1．はじめに
2．欲望の世界
(1)　マリー＝テレーズの信仰と官能のめざめ
(2)　プラス夫人のサディスム的態度と不幸への愛
(3)　マニュエルの欲望の苦悩
(4)　「在り得たこと」における欲望の世界
(5)　まとめ
3．死の魅惑と恐怖
4．結び

（太字は今回掲載分）[41]

2．欲望の世界

(4)　「在り得たこと」における欲望の世界

では次に、マニュエルの作成した物語「在り得たこと」を、現実生活における彼の欲望の苦悩とのかかわりで検討することにしたい。欲望の観点から、この物語を分析したいのである。

マニュエルは現実世界からの脱出をもとめて、ということはすなわち、欲望の苦しみからの解放を願って、「在り得たこと」を執筆する。しかしマニュエルは想像上の世界においても、欲望を、あるいは欲望の苦悩をかかえている。マニュエルが住むことになるネーグルテールの城は、肉体的な欲望がみられない世界ではないし、そうかといって、欲望がたやすくかなえられるところでもない。ネーグルテールの城は、「在り得たこと」の世界は、マニュエルが生きてきた世界と異質な世界ではない。逆に現実世界の延長上にあり、マニュエルが置かれた現実を色濃く反映している。

a．アントワーヌの放蕩とマニュエルの羨望

このことは、欲望を成就するアントワーヌの存在と、このアントワーヌにた

いする、マニュエルのあこがれとからうかがうことができる。ネーグルテールの城の主(あるじ)である伯爵の息子アントワーヌは、父親が病いの床についてから、自由に旅することを父親から許され、放縦な生活を送ったことがあった。マニュエルはアントワーヌのそうした生活をこう語っている。

「アントワーヌは、外国語を学ぶという口実のもとにフランスを離れ、(…) ぼくらの地方的偏見が通用しない隣国で、おきまりの放蕩をするのだった。この放蕩がいかに卑しく、汚らわしく、危険にみえようと、ぼくがその放蕩をどれほどまでにうらやんでいるかを言う必要があるだろうか？」(*Ce qui*, p.341)

マニュエルはアントワーヌの放蕩をうらやんでいる。アントワーヌはマニュエルが創造した人物であるので、マニュエルの分身であり、マニュエルはアントワーヌの放蕩の記述をつうじて自分の夢を追求し、現実には満たされない欲望のはけ口をもとめているのだという見方をすることができるかもしれない。しかし放蕩にふけり、欲望を容易に実現するアントワーヌのことを、マニュエルが羨望をこめて語っているところから、想像世界においてもまた、彼が欲望の苦しみを秘めていること、依然として欲望から解き放たれていないことを同時にみてとるべきであるように思われる。また、アントワーヌは旅行中だけでなく、ネーグルテールの城にもどってからも、放蕩に身をゆだねている。マニュエルは、元召使のジョルジュ夫人から聞いた話を次のように伝えている。

「ジョルジュ夫人は、彼［アントワーヌ］がまちに放蕩をしに出かけているのだと主張し、ぼくが天国のように思いえがいていた或る種の家に彼の姿がみうけられると言いはるのだった。(…) しかしながら、その人物を中傷するために、夫人が何を言おうと、ぼくの心をひきつける何かを彼から奪い去ることはできなかった。そしてその何かは、ぼくが心の中で若き主人の側につくようにしむけるのだった」(*Ce qui*, p. 343)。

マニュエルはアントワーヌのうちに「ぼくの心をひきつける何か」を、つまり魅力を感じ、アントワーヌの側についている。アントワーヌへの共感をいだかせるもの、それは彼の放蕩の生活である。「ぼくが天国のように思いえがいていた或る種の家」とはもちろん淫売宿のことだ。マニュエルは、そうした所にアントワーヌがためらいもなくかよっていることをうらやんでいるのであろう。ここでもまた、放蕩にふけるアントワーヌへの羨望がみとめられ、この羨望をとおして、マニュエルの充足されない欲望が浮かびあがってくるのである。

アントワーヌの放蕩とマニュエルの羨望をみてきた。ここから、『在り得たこと』の世界が欲望の世界であることがうかがえると思う。

b．子爵夫人のサディスム的欲求

『在り得たこと』の世界が欲望の世界であることは、アントワーヌの存在だけではなく、彼の姉の子爵夫人の存在とも関係しているのではないだろうか。子爵夫人はアントワーヌのように欲望を自覚的に生きる人間ではないけれども、抑圧された欲望を内部に潜在させている人物であるように思われる。子爵夫人は、現実世界のプラス夫人と同じく愛のない結婚生活を送っている。マニュエルは、「子爵夫人は、生まれが自分より劣っていると判断している夫をほとんど愛していなかった」（*Ce qui,* p.335）と指摘し、子爵夫人が結婚するにいたった事情を次のように説明している。

「どうしてぼくの女主人がこれほど卑しい求婚者をうけいれたのかは、神のみが知る。彼女はおそらく、この男が他の男と同じように自分の務めを果たすと考えたのであろう。というのも、彼女に匹敵しないものはなんの値打ちもなかったし、卑しいものと、さらに一層卑しいものとのあいだになんの違いも認められなかったからだ。それに彼女は娘のままでいることを望まなかった。そして、自分の地方の中でとびぬけて一番の家柄に生まれたからには、身分違いの結婚をすることしかできないことを、よく知っていた。それゆえ、最初に申し込んだ者、あるいはそれに近い者が受け入れられたのである」（p.335）。

この一節から、子爵夫人がほとんど行きあたりばったりに結婚したことがわかる。「彼女は娘のままでいることを望まなかった」と言われているように、子爵夫人にとって、結婚は娘から一人前の女になるための通過儀礼のようなものでしかなく、自分より値打ちのある男はいないのだから、結婚相手は誰でもよかったのである。もっとも、マニュエルはこのあと、子爵夫人の一族には遺伝的な病いがあって、夫人は自分の血のなかに流れるこの欠陥を健康で逞しい男との結婚によってなおしたかったのだとも述べている（pp.335－336）。しかし、これも今の夫と結婚した積極的な理由にはならない。なぜなら健康で逞しい男はほかにもたくさんいるわけだし、別の男でもかまわないからだ。『在り得たこと』において子爵はほとんど登場しない。子爵夫人は夫と交わりをもつことなく生きている。子爵夫人の結婚生活ははじめから破綻しており、夫人が満たされない欲望を内に秘めていることはたやすく想像されるのである。

子爵夫人の抑圧された欲望は、マニュエルとの関係をとおして看取することができる。マニュエルはネーグルテールの城に、プラス夫人の家の料理女レオンティーヌの紹介で召使と同等の身分でやってき、はじめのうち、レオンティーヌの兄のエクトールの、庭師としての仕事を手伝う。やがてマニュエルの存在

は子爵夫人の目にとまり、夫人はマニュエルに、病いの床にある父親の伯爵のために、ラテン語の祈禱書を朗読するという職務を依頼する。そしてマニュエルを自分のconfident（打ち明け話の聞き手）にするにいたる。このように子爵夫人はマニュエルを優遇し、召使の身分から救い上げる。しかしながら、子爵夫人はマニュエルにやさしい態度で接しているわけではない。「彼女［子爵夫人］はぼくを軽蔑していた。いや、軽蔑さえしていなかった。彼女の目には、ぼくは、朝から晩まで彼女に仕えている召使たちと同様にものの数ではなかったのだ」（*Ce qui*, p.311）とマニュエルが語っているところからうかがえるように、子爵夫人はマニュエルに横柄な姿勢でのぞみ、マニュエルに屈辱感を味わわせている。また、子爵夫人は、祈禱書を朗読する役目をマニュエルに頼んだとき、別のことも要求することによってマニュエルを刺戟している。

「――あなたに知らせておくのを忘れておりましたが、お客様のある日には、食卓で給仕をしていただきたいのです。

頬を平手打ちされたかのように、ぼくの顔に血がのぼった。ぼくは芝生に水をやることや、老人に本を読みきかせることには同意していた。しかし皿を運ぶなどということは、自分の誇りに課している限界を越えているように思えた」（*Ce qui*, p.317）。

子爵夫人はマニュエルの知性にふさわしい勤めを与えると同時に、食卓で給仕するという屈辱的な仕事も言いつけている。「頬を平手打ちされたかのように、ぼくの顔に血がのぼった」というマニュエルの反応は、彼が子爵夫人の言葉を侮辱の言葉のようにうけとり、怒りの感情をにえたぎらせていることを示している。ところで子爵夫人は、「お客様のある日には、食卓で給仕をしていただきたいのです」という命令を本気で口にしたのであろうか。このあと、マニュエルは、伯爵の世話をするジョルジュ夫人と二人だけで食事をするようになる。さらには、客室が与えられ、そこで一人で食事をすることさえ許される。マニュエルは召使たちとは完全にちがったあつかいをうけるのだ。このようなマニュエルのその後の待遇を考えると、子爵夫人はマニュエルを実際に食卓で働かせるつもりで言ったのではないように思われる。ではなぜこのような要求を口にするのか。それはマニュエルの誇りを傷つけ、屈辱感を味わわせることによって、彼を苦しめるためにほかならない。

マニュエルにたいする子爵夫人の傲岸な態度、マニュエルの自尊心を傷つけるような夫人の言葉をみた。マニュエルを前にしてのこうした言動からは、プラス夫人においてもみられたようなサディスム的な欲求が浮かびあがってくるのではないだろうか。プラス夫人と同様、子爵夫人は生きることのよろこび、

愛のよろこびを知らない。それゆえ、子爵夫人は他者に屈辱感をいだかせ、苦しみを与えることで、自らの不幸にたいする報復をこころみているように思われる。他者の苦しみの原因となるという点に、満たされぬ欲望のはけ口をもとめていると考えられるのである。

子爵夫人のサディスム的欲求は、弟アントワーヌがマニュエルに暴力をふるったときの夫人の対応からもみてとることができるように思われる。マニュエルは或る晩、栗の木が生えている小径を小走りにしている際、じっと立っている二人の人物にぶつかる。マニュエルがあやまろうとすると、二人の人物の中のひとりであるアントワーヌがマニュエルにげんこつをくらわせ、マニュエルを地面に倒す。そして暗闇のなかでマニュエルの顔の上に荒々しく指を走らせながら、「お前が誰であろうと、俺の名を口にしたら、たたきのめしてやるぞ」と威嚇する（*Ce qui*, p.313）。このようにアントワーヌはマニュエルに暴力をふるうのであるが、マニュエルはその場に居合わせたもう一人の人物について、次のように書いている。

「アントワーヌといっしょにいた人については、その人物はほとんどすぐに姿を消したので、男であるのか、女であるのかすらわからなかった。しかしぼくはあとになって、それが子爵夫人であることを知った」（p.313）。

この場面において、子爵夫人はアントワーヌの行動をはばもうとしていない。暴力をくわえたアントワーヌをとがめさえしていない。子爵夫人は、マニュエルが倒れた場所からすぐさま立ち去るものの、アントワーヌのふるまいを是認しているか、黙認しているようにみえる。見方によれば、アントワーヌは子爵夫人の代行をしているともうけとれる。少なくともマニュエルは、アントワーヌの暴力行為のうちに、子爵夫人の意向の反映を読みとることになる。放蕩にふけり、荒々しい人間に変貌したアントワーヌにたいする子爵夫人の気持ちをもんだいにしながら、マニュエルはこう述べている。

「彼［アントワーヌ］は以前よりもはるかに子爵夫人の気に入ることになった。夫人は彼に接近し、彼女なりの方法で彼をかわいがった。というのも、彼女はあらゆる男性的美徳の上位に荒々しさを置いていたからだ。（…）ぼくはのちに、夫人が彼に、ぼくをなぐるようにも励ましていたことを示したいと思う」（*Ce qui*, pp.343−344）。

マニュエルは、アントワーヌの暴力が子爵夫人のそそのかしによるものであると考えている。また、この一節では、子爵夫人がアントワーヌを、その「荒々しさ」（brutalité）ゆえに気に入り、かわいがっていたことが語られている。ここから、子爵夫人の「荒々しさ」への愛が読みとれる。「荒々しさ」への愛

とは、サディスム的欲求につうじるものであろう。アントワーヌは子爵夫人にとって、自らのサディスム的欲求をみたしてくれるべき存在なのではないだろうか。

アントワーヌはさらにもう一度、マニュエルに暴力をふるっている。マニュエルは、子爵夫人が禁じたにもかかわらず、ネーグルテールの城をかこむ森の中に散歩に出かける。その折、馬に乗ったアントワーヌに遭遇し、頬を鞭打たれるのである。このときのアントワーヌの挙動については、のちに仔細に分析するけれども、マニュエルは傷を負い、顔にハンカチを巻きつけなければならなくなる。このような恥辱をうけたマニュエルはネーグルテールを去る決心をし、子爵夫人に手紙をしたためる。マニュエルは自分の行いを以下のように語っている。

「弟にたいして復讐するために書きはじめながら、ぼくは突然、姉を非難するのだった。まるで彼女がぼくをなぐったかのように。そして或る意味でぼくは正しいのだった」(*Ce qui*, p.359)。

マニュエルはアントワーヌから暴行をうけたことの責任を子爵夫人になすりつけている。「まるで彼女がぼくをなぐったかのよう」に子爵夫人を「非難す」るマニュエルの姿勢は、先の引用文の、「夫人が彼に、ぼくをなぐるようにも励ましていた」という認識にもとづいている。とはいえ、作中、子爵夫人がほんとうにアントワーヌをそそのかして、マニュエルに危害をくわえるよう仕向けていたかどうかは、定かではない。しかし子爵夫人は傷ついたマニュエルの前にあらわれて、次のように言っている。

「誰があなたをなぐったかはたずねません。弟が、森の中であなたと話をしたと知らせてくれました。弟は激しやすく、こらえ性のない人です。ですから私は、彼がとおる道には居あわさないよう警告しておいたのです」(*Ce qui*, pp.361−362)。

子爵夫人はマニュエルにアントワーヌの行為をわびてはいない。逆に、森の中を散歩したことの非をマニュエルに認めさせようとしている。ということはすなわち、子爵夫人はアントワーヌの暴力的ふるまいを黙認しているか、それとも、それに同意していることになる。子爵夫人がアントワーヌに積極的なはたらきかけをしているのではないとしても、暴力を禁じないのであるから、マニュエルの側に立てば、子爵夫人はアントワーヌの共犯者とみなしうるのである。このような態度のうちにサディスム的な欲求をみてとることができるように思われる。他者に苦しみを与えたいという欲求がアントワーヌの暴力を許すという姿勢をもたらしていると考えられるのだ。そしてこうしたあり方が、子

爵夫人の抑圧された欲望と関係していることは言を俟たないのである。

マニュエルを前にしての子爵夫人の言動、マニュエルに暴力をふるうアントワーヌへの夫人の対応を検討した。この検討をとおして、子爵夫人のサディスム的欲求をみた。子爵夫人もまた、アントワーヌと同じように、欲望の人間であり、『在り得たこと』の世界を欲望の世界とするのに一役買っている。もっとも、子爵夫人の場合、欲望は抑圧されており、屈折したかたちであらわれている。しかしそれでも、子爵夫人が欲望の人間であることはかわりがない。そして子爵夫人の欲望は、物語の終わり近く、父親の伯爵が死んだ日にマニュエルと性の交わりをむすぶという事実によって、決定的に明らかになるのである。

c．マニュエルの、子爵夫人への執着

『在り得たこと』の世界が欲望の世界であることは、この物語の主人公になるマニュエルが子爵夫人に魅せられ、執着するという点にも起因しているのではないだろうか。マニュエルの、子爵夫人にたいする感情は、まず夫人への怒りというかたちをとって読者に知らされる。すでに述べたように、子爵夫人はマニュエルに傲岸な態度をとる。これにたいして、マニュエルはしばしば怒りをおぼえている。子爵夫人にはじめて会い、夫人の横柄さに接したときの心の動きは、次のように描かれている。

「そのとき、機会が与えられていたら、ぼくのようなおとなしい青年にも可能なかぎりのあらゆる残酷さをもって、この女［子爵夫人］に復讐しただろうと思う。(…)一日中、ぼくは怒りを反芻するのだった。ぼくは自分が何を思いえがき、何を願っていたのか、よくわからない。おそらく革命を、女主人の顔をなぐりに行くことを可能にするような、とてつもない出来事を望んでいたのだろう」(*Ce qui*, pp.311－312)。

マニュエルは子爵夫人の尊大な態度にたいして怒りの感情をいだき、暴力への欲求にとらえられている。この怒りの感情と暴力への欲求とが、召使のように子爵夫人に仕えなければならないという自己の屈辱的な状況への認識に根ざしていることはたしかであろう。まさにそれゆえにマニュエルは「革命」(une révolution) を待望するのである。けれども、マニュエルの感情が召使の地位に甘んじなければならないことへの反応であると割り切るだけでは、彼の感情を完全に理解したことにはならない。というのも、上の引用文の直前には、子爵夫人への微妙な気持ちを語った一節もみいだせるからである。すなわち、子爵夫人はマニュエルにはじめて言葉をかけたとき、彼に庭の薔薇の花を切りとらせる。その折、マニュエルは夫人から下手な仕事ぶりを非難されて、次のように反応している。

「ぼくの最初の衝動は、十八世紀の小説の中にあるように、夫人の足もとに身を投げることだった。だがぼくはそのばかげた衝動を抑え、恥ずかしさのあまり顔を真っ赤にして、うなだれるだけにとどめた」(pp.310−311)。

マニュエルは怒りの感情にとらえられる前に、子爵夫人の「足もとに身を投げ」たい衝動にかられている。マニュエルは子爵夫人に仕え、服従することを必ずしもいとってはいない。ここから、マニュエルの怒りの感情と暴力への欲求は、子爵夫人に軽蔑されていること、もしくは、自分の存在を認められていないことから生じているとうけとれ、執着の裏返しのあらわれと解することもできるのではないだろうか。このことは、子爵夫人から伯爵のために祈禱文を朗読するよう依頼されるとともに、客のある日には食卓で給仕するように要求された際の、マニュエルの感情を言いあらわした、次の一文を読むことによっていっそう鮮明になる。

「彼女［子爵夫人］がぼくの内心に怒りの感情を喚び起こしたにもかかわらず、ぼくは彼女の態度にそなわった威厳に感嘆しないではいられなかった」(*Ce qui*, p.317)。

ここでもマニュエルは子爵夫人に怒りをおぼえている。この怒りは、皿を運ぶという屈辱的な仕事を言いつけられたことに原因している。だがマニュエルは同時に子爵夫人の「威厳」(dignité) に感嘆してもいる。この感嘆の念は、子爵夫人にたいするひそかなあこがれを意味するであろう。とすれば、マニュエルの怒りは、子爵夫人が自己を評価せず、魂をもった同等の人間としてあつかわないことへの反応だとみなすことができ、結局、彼の内心でめばえた、子爵夫人への執着の感情を浮き彫りにしていると考えられるのである[42]。

マニュエルじしん、子爵夫人にたいする執着の感情を自覚することになる。ネーグルテール伯爵のまえでラテン語の祈禱文を朗読するという任務を果たしたのち、マニュエルは子爵夫人の訪問をうける。その折、子爵夫人は父親の伯爵のことでマニュエルと会話をかわす。マニュエルにたいする夫人の態度は相変わらず尊大なものである。マニュエルはこのときの心の動きを書きとめている。

「≪どうしてこの女はぼくの頬を平手打ちしないのだろう？≫とぼくは自問するのだった、≪話の中にちっぽけな侮辱をまき散らすより、その方がよほど卒直なやり口なのに≫。それでもぼくは、自分が彼女に愛着をいだいているのを感じた」(*Ce qui*, p. 331)。

さいごの、「それでもぼくは、自分が彼女に愛着をいだいているのを感じた」という一文から、マニュエルが子爵夫人への執着の感情を自覚していることが

わかる。マニュエルは、子爵夫人の女帝然とした居丈高な態度にもかかわらず、というよりそれゆえに、執心の感情をつのらせるのである。ここから、マニュエルにおけるマゾシスムへの傾向を指摘することができるかもしれない。だがマニュエルにおいては、マゾシスムはサディスムとわかちがたくからみあっているのであろう。先にみた怒りの感情と暴力への欲求は、子爵夫人から冷ややかなあしらいをうけたことへの報復の欲求であり、肉体的欲望の屈折した発現としてのサディスム的欲求なのだと思われる。

子爵夫人にたいする、マニュエルの執着と欲望は、アントワーヌから二度目の暴行をうけたあと、決定的なかたちで示される。この挿話は、マニュエルが長らく子爵夫人と会わなくなってからのこととして語られている。前述のように、マニュエルはアントワーヌから頬を鞭打たれ、辱められたことで、ネーグルテールの城を去る決心をし、子爵夫人に手紙を書く。このとき、マニュエルの内心を支配するのは、子爵夫人への思いである。

「実のところ、ぼくは彼女［子爵夫人］に復讐することしか望んでいなかった。彼女の薄笑いや、声音や、毎日屈辱的な思いをさせていた彼女の軽蔑や、彼女の連続的な不在や、ぼくがこの世にいること、ぼくが誰であるか、そしてなぜぼくがここにいるかを絶えず忘れてしまう彼女のやり方に復讐することだった」(*Ce qui*, p.359)。

マニュエルは城からの出発によって、子爵夫人に復讐することを望んでいる。子爵夫人の横柄で軽蔑するような態度への怨み、夫人が自分の存在を無視し、あるいは忘れ去ることへの怨みを晴らしたく思っている。このような怨みは、子爵夫人にたいする執着の感情と表裏をなすものであり、結局のところ、彼の復讐欲は、夫人への満たされぬ欲望のあらわれにほかならない。それゆえ、城を去るというマニュエルの決意が、子爵夫人の意向しだいで造作なく揺らぐことは容易に推察される。ジョルジュ夫人をつうじてマニュエルの決意を知った子爵夫人が、久しぶりでマニュエルの前にあらわれた際の、彼の内心の感情を語った文章を読むことにしよう。

「心ならずもぼくは夫人の荒々しくて傲然とした物腰、まことに彼女に似つかわしい命令的な態度に感心するのだった。だからぼくはこうして彼女に会うことを恐れていたのだ。なにしろ彼女は、自分がどれほど威嚇的な力をぼくにおよぼしているかを重々承知していた。まさしく彼女が口をひらく前に、ぼくは彼女に負けていた」(*Ce qui*, p.361)。

マニュエルは、子爵夫人の「荒々しくて傲然とした物腰」あるいは「命令的な態度」に魅せられている。子爵夫人の横柄で軽蔑的な態度に反撥しながらも、

それに惹きつけられるのだ。したがって、マニュエルは子爵夫人のそばを離れることができない。「ぼくは彼女に負けていた」と書いているように、マニュエルは城を去るという決意をいとも簡単に放棄してしまうのである。子爵夫人はこのあと、マニュエルに客室を与え、給料を三倍にすることを約束する。マニュエルを城にひきとめるものは、こうした待遇の改善でもある。だが、根本的には、子爵夫人への彼の執着であり、マゾシスム的な欲望であろう。マニュエルのマゾシスム的な欲望は、子爵夫人が待遇の改善にかかわる言葉を口にしたあと、彼が感謝のあまり、「女主人の足もとに身を投げ」たり、「手に接吻し」たりする衝動にかられているところからも明瞭である（p.363）。

マニュエルの、子爵夫人にたいする執着あるいは欲望をみてきた。マニュエルは夢想の世界においても欲望の人間なのだ。子爵夫人への彼の執着が、『在り得たこと』の世界を欲望の世界にする大きな要因になっているのである。

d．マニュエルと子爵夫人との性行為の場面

『在り得たこと』の世界を欲望の世界にする最大の要素は、物語の終わり近くに置かれた、マニュエルと子爵夫人との性行為の場面である。こんどはこの場面を分析することにしたい。

子爵夫人は父親の伯爵が息をひきとった日の夜明け前、マニュエルの部屋を訪れ、マニュエルのベッドの中にもぐりこむ。子爵夫人がやってくるのは欲望のせいであろう。子爵夫人は抑圧された欲望を内にかかえて生きてきた。この欲望が父親の死をきっかけとして堰を切り、あふれ、子爵夫人を支配したと考えられるのである。だが子爵夫人のふるまいには、語り手マニュエルの意向も影響をおよぼしているように思われる。マニュエルとは『在り得たこと』の主人公であるばかりではなく、この物語の作者でもあるがゆえに、語り手マニュエルの欲望が子爵夫人の出現をうながしたともうけとれるのである。この点を踏まえて、もんだいの場面を読むことにしよう。

「――おいで、と彼女［子爵夫人］は言った。

これに続く記憶は、深い嫌悪と混じり合っている。ぼくは獣のようにこの女の上に飛びかかったが、しかし欲望と同じだけの怨恨がともなっていた。というのも、彼女の横柄な態度を何ひとつ忘れていなかったし、彼女からうけた命令の中には、更に無礼さしかみいださなかったからだ。ぼくがついになそうとしているこの不思議な愛の行為は憎しみの行為の代わりをし、それと溶け合っているようにぼくには思われた」（*Ce qui*, p.377）。

マニュエルは欲望にかられて子爵夫人に飛びかかっている。けれども、この

欲望には「怨恨」(rancœur) や「憎しみ」(haine) が混じり合っている。このことは、マニュエルの、子爵夫人への執着が純粋な愛情ではないことを示している。彼の執着は、反撥と表裏をなす気持ちであり、愛と憎しみとが一体となった感情なのであろう。これまでマニュエルは、子爵夫人の傲岸な態度に屈辱感を味わわされつつも、それに魅せられて生きてきた。ここでマニュエルをうごかしているのは、これまで耐えしのんできた屈辱の思いにたいする報復欲であり、マゾシスムへの傾斜の反動としてのサディスム的欲求なのだと思われる。また、さいごの一文に語られているように、「愛の行為」が「憎しみの行為」と化すという事実は、子爵夫人にたいするマニュエルの感情にそくして理解できるばかりではなく、マニュエルの純粋志向とのかかわりでとらえることもできるのではないだろうか。純粋志向は欲望の対象を忌避する姿勢をもたらすのみならず、欲望の対象への憎しみをも必然的に生じさせる。それゆえ、純粋志向を有するとき、愛の行為は憎しみをともなったサディスム的なものにならざるをえないのだ。さらにまた、この事実は、『在り得たこと』を書きおえ、死を間際にしたマニュエルがマリー＝テレーズに打ち明ける、「ぼくが愛していたのは君なんだ」(Ⅲ, p.389) という言葉との関連で把握することもできる。すなわち、マニュエルは現実世界においてはマリー＝テレーズを愛していた。しかしながら、マニュエルは現実からのがれ、夢想の世界に生きることを余儀なくされた。そこでマニュエルは子爵夫人を創造＝想像し、マリー＝テレーズにかわって夫人を愛と欲望の対象にする。だがマニュエルがほんとうに交わりをもちたかったのは、マリー＝テレーズであるので、子爵夫人との性行為は「憎しみの行為」になるのだとも考えられるのである。

このようにマニュエルは「怨恨」と「憎しみ」をともなった欲望をいだいて、あるいはサディスム的な欲求をいだいて、子爵夫人と性の交わりを結ぶことになる。とはいえ、二人の性行為において主導権をにぎるのはマニュエルではない。続く記述を見てみることにしよう。

「しかしながら、女主人の蒼白くて冷たいからだが、ゆっくりとぼくの上で閉じられた。そのからだは、香りの甘さで昆虫を惹きつけておいて、閉じこめてしまうと言われる、あの恐ろしい花々に似ていた。(…) 快楽のさなかに、ぼくは、自分がもがき、しっかりと抱擁したまま手足のゆるむことがない一人の死んだ女をあたためているような印象をうけた。この凍りつくような抱擁はよろこびのさなかでさえ、ぼくに恐怖を味わわせた。官能の陶酔と呼ばれるものも、自分が餌食であって、支配者ではないと悟ることを妨げはしなかった。胸から洩れるよろこびと苦悶の叫びを、ぼくは重た

い髪の毛のなかで押し殺すのだった」(pp.377－378)。

マニュエルが「官能の陶酔」のなかで「自分が餌食であって、支配者ではない」ということを理解しているところからわかるように、二人の性行為において主導権をにぎっているのは子爵夫人である。また、マニュエルのからだが「昆虫」に、子爵夫人のからだが、その「昆虫」を閉じこめてしまう「恐ろしい花々」になぞらえられていること、そして、マニュエルが「重たい髪の毛」のなかで「叫び」を「押し殺」していることが注目される。マニュエルは子爵夫人のからだに完全に閉じこめられ、支配されているのである。さらに、この一節で、マニュエルが子爵夫人の冷たい肉体を抱擁することによって、というより、冷たい肉体に抱擁されることによって、「一人の死んだ女をあたためているような印象をうけ」ている点は重要であろう。この印象は間違ってはいない。実際、子爵夫人はマニュエルとの肉体の交わりの中で、死のほうに向かっていくからである。

このあと、マニュエルは子爵夫人の執拗な抱擁から自らを解き放つためにもがく。だが子爵夫人は「全力をあげ」てマニュエルを「ひきとめ」、マニュエルをますます強く抱きしめる。この時点でマニュエルの内心を支配するのは、子爵夫人にたいする≪horreur≫（恐怖、嫌悪）である（p.378)。さらに引用をつづけよう。

「一息つくために、ぼくはもがくのをやめ、じっと動かずにいた。彼女は目をひきつらせて待ったが、彼女は、泳ぎ手にしがみつき、そのすべての重みでもって海の奥底に引きずりこもうとする溺れる女に似ていた。長い時が経った。突然、恐ろしい錯乱がこの女を揺りうごかした。ぼくは乏しい経験のために、彼女は気が狂ったのだと思った。事実、彼女の歯が首の付け根の肌を食いちぎるのを感じて、ぼくは恐怖の叫び声をあげた。手の片方だけでも自由にすることができたら、彼女を絞め殺していただろう。(…) 不意に彼女は腕をひらき、彼女のゆるんだからだは、虚無の中に落ちていくように、ぼくのからだから離れた。(…)

彼女は死んでいた」(pp.378－379)。

上の引用文で、子爵夫人はまず「泳ぎ手にしがみつ」く「溺れる女」にたとえられ、そして「恐ろしい錯乱」を経て、「虚無の中に落ちてい」こうとしている。ここから子爵夫人が死に向かいつつあることが了解される。子爵夫人を揺りうごかす「恐ろしい錯乱」は、快楽の絶頂を示すというより、断末魔の苦悶に近いものとみなすことができよう。また、この場面で、子爵夫人とマニュエルがともに殺意をいだいていることが注意をひく。「溺れる女」に擬せられ

た子爵夫人は、「泳ぎ手」としてのマニュエルを「海の底に引きずりこもうとし」ているし、それに「錯乱」のなかで「首の付け根」の部分をかむことによって、マニュエルを殺そうとしている。一方、マニュエルもまた、「手の片方だけでも自由にすることができたら、彼女を絞め殺していただろう」と語っているように、子爵夫人を殺すことを考えている。こうして二人の愛の行為は「憎しみの行為」を越えて、半ば殺しあう行為と化している。この点にかんして、「エロティスムの帰結は殺人である」[43] というグリーンの見解を視野に入れておくことは必要であろう。「エロティスム」(érotisme) なる語は「欲望」(désir) という言葉によって言いかえることができる。グリーンにおいては、欲望は殺意をもたらすものと認識されているのである。

では、どうして子爵夫人とマニュエルは互いに殺意をいだきあうのか。どうして欲望の帰結が殺人となるのであろうか。まず考えられることは、欲望とはその対象を所有したいという欲求である以上、必然的に殺意を生じさせるという点である。対象の全的な所有は対象の死によってはじめて可能になると思われるからだ。実際、対象が生存しているかぎり、対象は欲望をいだく主体からは自由であり、主体に従属したことにならない。しかし欲望の対象に死を与えるとき、その対象は欲望をいだく主体によって支配されたことになり、主体は対象を完全に所有したともみなせるのだ。とはいえ、こうした説明は子爵夫人の行為を解釈するときには有効であるけれども、マニュエルのふるまいを考察する場合には妥当性をもたない。というのも、マニュエルは必死になって子爵夫人の抱擁からのがれようとしているからだ。そこで次の解釈を提出することにしよう。少なくともマニュエルの殺意には、純粋志向が関係しているように思われる。言うまでもなく、純粋志向は欲望の対象を忌避する。この忌避が極限にまで押しすすめられると、欲望の対象の消滅への願いが必然的に生じる。純粋志向は欲望とのたたかいの過程で、欲望の対象を殺害したいという欲求を招来するのだ。純粋志向を内にかかえるとき、欲望はその対象を殺したいという欲望をも包含することになるのである。マニュエルの殺意は、子爵夫人だけでなくマリー＝テレーズにたいしてもみられた。第一部第八章、マニュエルは欲望にかられてマリー＝テレーズを夜の散歩に連れ出し、屋敷跡に着いてからマリー＝テレーズのからだにふれる。このとき、マリー＝テレーズはマニュエルの行いのうちに殺意を嗅ぎわけていた。この殺意も、子爵夫人への殺意と同様、純粋志向とのかかわりでとらえることができるのである。

マニュエルと性の交わりを結んだあと、子爵夫人が死ぬという事実も、この

ような文脈の中で把握することができるのではないだろうか。つまり子爵夫人を死に至らしめているのは、『在り得たこと』を作成しているマニュエルであり、結局、作者＝語り手としてのマニュエルが子爵夫人を殺しているという見方をすることができるのである。このことに関連して、ミシェール・ラクロは子爵夫人の死をめぐって、「子爵夫人が死ぬのは、マニュエルが彼女を殺したいという狂おしい欲望をいだいているためである。主人公がこの女を実際に殺害しないとしても、夢の中で彼女を殺しているからである」[44] と述べている。ミシェール＝ラクロもまた、子爵夫人の死の原因を、物語の作者であるマニュエルの意向＝願望にもとめている。そして作者＝語り手としてのマニュエルが子爵夫人の死を望むのは、もちろん、彼が純粋志向を有しているからなのである。

マニュエルと子爵夫人との性行為の場面を分析してきた。そして分析の途中で浮かびあがった欲望と死との結びつきを、純粋志向とのかかわりで考察した。ところで、『幻を追う人』において、欲望と死との結びつきはもう一箇所でみられた。第一部第六章、マニュエルが夕食前に、欲望に揺りうごかされてマリー＝テレーズに、夜の十一時に二人だけで食堂で会おうと誘いかけるところである。マリー＝テレーズはこの折、「彼が死ぬのではないかという思い」をいだいていた。それはなぜだろうか。ここでは、欲望の対象ではなく、欲望をいだく主体が死と結びつけられている。したがって、欲望とはその対象を殺したいという欲望でもあるといった説明はあてはまらない。そこでまず考えられるのは、マニュエルが病いにおかされているにもかかわらず、欲望とのたたかいに苦しんでいるのだから、肉体の苦悩が彼を衰弱させ、死に接近させているという解釈である。この解釈はテクスト内部のもんだいとして考えるとき、正当なものであろう。けれども、欲望をいだくマニュエルが死に近づくもう一つの理由として、『幻を追う人』の作者グリーンの純粋志向の影響が挙げられるのではないだろうか。なぜなら純粋志向とは、欲望の対象を殺したいという欲求をもたらすばかりではなく、欲望への憎しみが高じて、欲望をいだく主体を処罰し、死をもたらすように導くこともありうるからだ。『幻を追う人』がマニュエルの死によって終わるのは、病気の悪化という理由のみならず、純粋志向を有する作者グリーンの意向によるものと解することもできる。同じように『在り得たこと』の結末の子爵夫人の死も、夫人がマニュエルの欲望の対象であるからだけでなく、夫人が欲望をいだくという事実それ自体と関係しているであろう。つまり物語の作者であるマニュエルは、純粋志向をもつがゆえに、欲望の対象

としての子爵夫人を死に至らせているばかりではなく、子爵夫人が欲望に身をゆだねたことで、処罰の意味をこめて夫人に死を与えているとも考えられるのである。

(5) まとめ

以上、マリー＝テレーズの信仰の吟味から出発して、マリー＝テレーズの官能のめざめ、プラス夫人のサディスム的態度と不幸への愛、そしてマニュエルの肉体的苦悩を検討し、それから、『在り得たこと』を欲望という観点から分析した。さて、『幻を追う人』は主人公マニュエルが作成した物語『在り得たこと』を含んでいるがゆえに、はじめに問題点として指摘したように、グリーンにとっての創造行為の意味ないし意義を解く鍵を提供している。そこでこの点について考察してみたい。

まずマニュエルにとっての書くことの意味を論じることにしよう。重要なことは、マニュエルが現実世界で味わった肉体的苦悩を、夢想の世界においてもひきずっているという点である。すでに見たように、『在り得たこと』の世界は欲望の世界であるし、子爵夫人に執着するマニュエルは相変わらず欲望の人間である。放蕩にふけるアントワーヌや、サディスム的欲求を有する子爵夫人もまた、欲望の人間である。アントワーヌは放蕩の生活によって、マニュエルが夢見る理想の人間を具現している。子爵夫人は欲望をいだくという点では、アントワーヌと同様、マニュエルの分身であるかもしれないが、マニュエルに欲望をいだかせるという点では、マリー＝テレーズに対応する人物であろう[45]。これらの点から、『在り得たこと』は、現実生活におけるマニュエルの欲望、または欲望の苦悩を基盤として作成されているといえる。マニュエルは内心に宿る欲望あるいは欲望の苦しみを物語の中に表出することによって、そこからの解放を目指しているのだと思われる。欲望もしくは欲望の苦しみは、物語の中に移し入れられることがなければ、現実生活においてマニュエルを危機におちいらせ、破滅にみちびくほどのものであったのであろう。第二部第五章の終わり近くにみいだされる、次の注釈的文章[46]は、このような脈絡のなかで理解しなければならない。

「彼［マニュエル］が創造した想像上の世界は、ついに日々の生活とまじりあい、言わば彼の精神的な存在の一部をなすようになった。それは、長い苦しみの一日の終わりに彼が向かっていく避難場なのである」(p.307)。

ここでは、想像世界、『在り得たこと』の世界がマニュエルにとって「避難場」(refuge) であることが言われている。しかしながら、この「避難場」は

マニュエルの「苦しみ」と無関係にあるわけではない。「苦しみ」つまり肉体的苦悩を発現させなければ、マニュエルの想像世界はけっして「避難場」とはなりえないのだ。したがって、マニュエルにおいて、書くことは欲望との関連でカタルシスあるいはexorcismeの価値を有するとみなされるのである。

同じことは、作家グリーンについても言えよう。グリーンの『日記』を読めば、彼もまた、『幻を追う人』を執筆していたころ、欲望に苦しんでいたことがわかる。たとえば、グリーンは1933年1月24日付の『日記』のなかで、「私は肉体的な愛なしに生きていくことができない」[47]と書いているし、同年3月18日には、「フランシス・トンプソンの詩を読んだが、その詩は私のうちに、快楽の生活以外のものへの願いを目ざめさせた」[48]という記述がみいだせる。この記述は、1933年当時のグリーンが「快楽の生活」を送っていたか、あるいはそれにあこがれて生きていたことをうかがわせる。また、『幻を追う人』刊行から四ヵ月後ではあるが、1934年7月には、グリーンは、「昼も夜も、私は自分のうちに巨大な飢えをかかえている。(…) 私は、自分の全存在が肉体的な幸福を待ちこがれているのを感じる」[49]と言っている。このようにグリーンもまた、肉体的欲望に責めさいなまれていたのである。グリーンにとっても書くという営みは欲望と密接に関係しているのであろう。『幻を追う人』において、欲望はマニュエルだけでなく、マリー＝テレーズ、プラス夫人においてもみられた。作中人物たちはグリーンの内心の欲望を糧としているのではないだろうか。グリーンは1933年1月24日付の『日記』のなかで、「しばしば私は心をとても重たくし、頭を欲望で疲れさせて起きることがある。今、私の生活の中で一種の平衡をなしている仕事がなければ、私はまさしく欲望に取りつかれた人でしかないだろう」[50]と述べている。つまり、「仕事」が実生活において欲望との関連で「一種の平衡」をもたらしていると指摘している。グリーンは作品の中に肉体的苦悩を表出することによって、内心の均衡を保ちえているのだ。グリーンにとってもまた、書くことは、欲望とのかかわりでカタルシスないしexorcismeの価値をもっているのである。

では次に、『幻を追う人』における幻想性をもんだいにすることにしたい。ここまでの読解を踏まえて、グリーンの作品における幻想とは何か、という点について考察しておきたい。はじめに指摘したように、シュネデールの定義にそくするならば、幻想とは日常的なものとの「断絶」、日常生活における「裂け目」を示すがゆえに、『幻を追う人』において幻想性は、『在り得たこと』の全体、それに第一部第八章の夜の散歩、第二部第五章の森の散歩の挿話によっ

てもたらされている。これらの部分においては、マニュエルまたはマニュエルが創造した人物たちの欲望が発現している。ここから、グリーンにおける幻想とは欲望の表出によって生じるものだといえよう。だが、グリーンにおける幻想はこれだけにとどまらない。トドロフによれば、幻想とは「一見、超自然的な出来事」を前にして感じられる「ためらい」のことであり、「一見、超自然的な出来事」のひとつに、『在り得たこと』の中の子爵夫人の不意の出現と死が挙げられた。子爵夫人の不意の出現は夫人の、あるいは語り手マニュエルの欲望と関係しているけれども、子爵夫人の死は語り手マニュエルの純粋志向に由来している。マニュエルにおける欲望の対象の徹底的な忌避、欲望への憎悪が子爵夫人の死を招いていると解される。それゆえ、幻想とは、欲望とのたたかいから産出されるものとみることができる。マニュエルと子爵夫人との性行為が「憎しみの行為」、半ば殺しあう行為と化すのも、マニュエルの純粋志向、もしくは、欲望とのたたかいに起因している。さらに夜の散歩や森の散歩の場面も、それを抜きにしては考えられない。欲望をいだきながらも、欲望とたたかわなければならない苦しみ、この苦しみが顕在化したものが、幻想にほかならない。グリーンの作品における幻想とは、純粋志向とかかわる肉体的苦悩の一つのかたちであると結論することができるのである。

註

41) 目次の１．に該当する部分は、『『幻を追う人』読解のこころみ(1)』、山口大学「文学会志」第46巻、1995、pp.58－71を、２．の(1)(2)にあたる部分は、『『幻を追う人』読解のこころみ(2)』、山口大学「独仏文学」第18号、1996、pp.97－112を、２．の(3)は、『『幻を追う人』読解のこころみ(3)』、同「文学会志」第47巻、1996、pp.21－38を参照。

42) また、『在り得たこと』の中には、「この女性［子爵夫人］から評価されることをもとめていたのに、彼女の気を悪くしたことをぼくは後悔するのだった」(p.352) という一文もみいだされる。マニュエルは子爵夫人から評価されることを望んでいる。この望みは、夫人への執着の感情をうかがわせる。

43) *Le Miroir intérieur, Journal VI,* 9 mai 1954, IV, p.1336. また、グリーンは、「エロティスムの当然の帰結が殺人であることは、私にはたしかなことのように思われる。犯罪はある種の肉欲の過剰の延長にすぎない」(*Vers l'invisible, Journal VIII,* 27 octobre 1958, V, p.152) と述べ、「エロティスムの最高の結末はただ単な

る殺人である」(*Vers l'invisible,* 18 octobre 1966, p.409) とも言っている。

44) Michèle Raclot: *Le sens du mystère dans l'œuvre romanesque de Julien Green,* Aux amateurs de livres, 1988, t. I , p.257.

45) 従来の研究では、子爵夫人はプラス夫人に対応する人物であるとする見方が優勢である。Antoine Fongaro は、子爵夫人が「マニュエルの想像力によってデフォルメされた、伯母プラス夫人の複製」(*L'Existence dans les romans de Julien Green,* Signorelli, Rome, 1954, p.135) であるとみなしているし、Jean-Claude Joye は子爵夫人のことを「別名プラス夫人」(*Julien Green et le monde de la fatalité,* Arnaud Druck, Berne, 1964, p.103) と言っている。さらに Nicholas Kostis は、「この横柄な女性［子爵夫人］はマニュエルの想像力の中での彼女の存在の起源を、プラス夫人に負っている」(*The Exorcism of Sex and Death in Julien Green's novels,* Mouton, 1973, p.73) と述べている。たしかにプラス夫人と子爵夫人とは、マニュエルにたいしてサディスム的な態度をとるという点で類似性を有している。また、子爵夫人は、Jacques Petit も言うように、マリー＝テレーズとくらべて「より年上であり、より美しく、より知的」(*Julien Green, ≪l'homme qui venait d'ailleurs≫,* Desclée De Brouwer, 1969, p.151) であるがゆえに、マリー＝テレーズとは違ったタイプの女性である。しかし子爵夫人は、マニュエルの欲望の対象・結晶であるという点において、マリー＝テレーズに照応する人物であるとみなすべきだと思われる。

46) 第二部第五章の終わり近くには、マニュエルの手記の中に、マニュエルが夢想の世界に逃亡する事情を第三者の語り手が語った、十行のイタリック体の文章が挿入されている。引用文はその文章の一部である。

47) *Les Années faciles, Journal I,* 24 janvier 1933, IV, p.218.

48) *Les Années faciles,* 18 mars 1933, p.231.

49) *Les Années faciles,* 30 juillet 1934, p.326.

50) *Les Années faciles,* 24 janvier 1933, p.218.